九州男児のお手本、島津義弘の底力

◆家臣に慕われた鬼

現在、放送されている「西郷どん」の主人公、西郷隆盛が心から尊敬してやまない人物のひとりに島津斉彬がいます。島津氏第28代当主であり、列強の諸外国の中で日本国がどうあるべきかをいち早く考え、薩摩藩の富国強兵に成功した人物です。

評価の高い斉彬ではありますが、そのご先祖様には、さらに見上げた人物がおりました。それが、島津氏第17代当主の島津義弘です。義弘は戦国時代に「鬼島津」と呼ばれ、幾多の武功を成し遂げた人物として知られます。

有名なエピソードのひとつに、関ケ原合戦の「敵中突破」があります。

石田三成率いる西軍は、戦が始まってすぐに総崩れの呈を成し、義弘が大将を務める島津軍は戦場に取り残されてしまいます。あわやというときに義弘が取った行動、それは決死の覚悟で前方の敵中に向けて突撃することでした。これが世にいう「島津の退き口」です。小部隊を足止めさせて死ぬまで戦わせ、全滅したらまた次の小部隊で敵を防ぎ、それを繰り返す間に本隊を逃げさせる、これを「捨て奸」といいますが、この戦法で見事島津軍は闘いながらの撤退に成功するのです。

足止めをする小部隊はいわばトカゲの尻尾切り、完全な捨て駒です。300人残っていた島津藩は、わずか80人しか生存できませんでしたが、敵の重要人物も何人か討ち取っています。また、生存の可能性が皆無である小部隊には、指名されたのではなく、みずから志願する兵が多かったといわれ、義弘が大将として慕われていたことがわかります。

◆武将と外科医の二刀流

家来思いの義弘ですが、勇ましい姿のほかに、「金創医」の顔を持っていました。

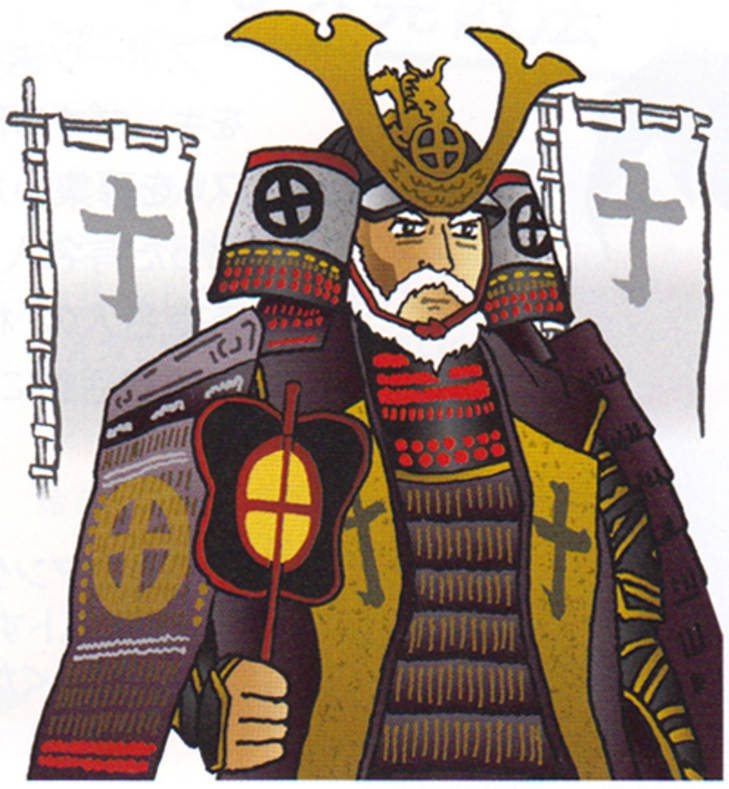
「金創医」とは、槍や刀、鉄砲などによって負傷した創(傷)を治す外科医のことです。傷はまずよく洗って止血し、気付け薬などを用いながら縫合する治療法で、現在の外科的処置の基本を踏襲していました。しかも、痛みに苦しむ者に対し、まじないのような言葉で話しかけ、気持ちを和らげたといいます。ケガをした子どもに「いたいのいたいの、飛んでいけー」と言うあれと同じ。金創医として、家来たちにも治療を施した義弘、島津家の当主からそのような心優しい言葉かけがあれば、それだけでも傷を治す効果が期待できたことでしょう。

当時、金創医の中には産科を手掛ける者が珍しくありませんでしたが、義弘も産科医として子どもの出産に立ち会ったり、逆子を治したりしたといわれます。家来たちにしてみれば、わが当主がみずからの手で傷の治療にあたり子の誕生に携わることで、ますます尊敬と忠義の心に満たされたのではないでしょうか。

さて、戦といえば兵糧です。義弘が好んだ兵糧は、「あくまき」だったと伝わっています。あくまきとは、ちまきのようなもの。薩摩式あくまきは、樫木を燃やしてできた灰の汁にもち米を一晩浸し、水気をきった後竹の皮で包み、再び灰汁を使って煮るのだそう。竹の皮には抗菌作用のあるフラノボイド色素が含まれており、兵糧に適した食材だったといえます。

勇ましく情厚い当主として生きた義弘。85歳で逝去した際、殉死禁止令が出されていたにも関わらず13人が後を追って自死したといわれます。

今や、ほとんど死語となった感のある「九州男児」、いえいえ歴史の中にその軌跡はしっかり残っていました。



植田美津恵（うえだみつえ）

医学博士・医学ジャーナリスト。愛知医科大学医学部客員教授、東京通信大学准教授。日本未病システム学会評議員、日本思春期学会理事。著書に『江戸健康学』『戦国武将の健康術』など。近著『忍者ダイエット』も好評発売中。